かつては鉱石成金を夢見る人間で栄えた街も、今では重機と市場経済の発展によってすっかりのどかな田舎町となっていた。――〝なれの果ての街〟と呼ぶ住民も多い。

人口が増えるにつれて拡大された街の規模は、住民の減少にしたがって縮小することもなく、広々としたエリアに点々と人が住む環境は良く言えば開放的で、実際は人と人のつながりが希薄になりやすく閉塞感のある土地だった。

ジョーイのダイナーはやや小規模ながら、そんな街にあって数少ない〝人々の集まる場所〟だった。

ジョーイはクマのような体格にヒツジみたいなヒゲと髪が特徴的な男で、もう40年も街でダイナーを営んでいた。そこまで料理の上手い店ではなかったが、ジョーイは街でも特に有名人で、彼はまた多くの人から愛されていた。あるいは気の毒にと同情する者もいたが。

ジョーイには少し変わった〝癖〟があった。

彼のそれが初めて人に知られたのはもう10年も前のことで、彼の妻――エイミーの葬儀が終わって1週間後のことだった。

「ジョーイ、もう少しくらい店を休んでいた方が良いんじゃないか」

常連客のドニーが店の窓の外からエプロンを着けたジョーイを見かけて、店内に入って開口一番にそう告げた。

するとカウンターから出てドニーを迎えたジョーイは、ヒゲを指で触りながら

「そうは言ってもな、ドニー。エイミーのやつが『いつまでも休んでんじゃないよ』なんてうるさいもんだから、おちおち休んじゃいられねぇんだ」

いかにも苦笑いといった表情を浮かべると、ジョーイは軽く肩をすくめて指でカウンターの奥を示した。

「何を言ってるんだ、ジョーイ。エイミーは、その、彼女はもう」

ドニーは驚き、戸惑いながらも、悟った。あぁ、彼は現実を見られていないんだと。

「なぁジョーイ。悪いことは言わねぇから、とりあえず今日のところは」

「うるせぇな！　分かってるよ！」

ドニーが気づかわしげにジョーイへ再度、休むように促そうとした時だった。彼の言葉を遮るように、ジョーイが大声を上げた。

クマのように大柄な男に怒鳴られて、ドニーは思わずすくみ上がった。しかし、恐る恐るジョーイを見て、ドニーは驚き、戸惑いながらも悟った。

ジョーイはドニーを見ていなかった。彼の声は目の前のドニーに対してでなく、ドニーには見えないカウンターの向こうの誰かへ発せられていた。それが誰なのか、正体は直後にジョーイの口からもたらされた。

「悪いな、ドニー。あいつが『いつまでお客を入り口で立たせとくんだ』ってしつこいもんだから。とりあえず席に座って待っててくれや。――うるせぇな！　お前は何でそうせっかちなんだ！」

ドニーはいっそ逃げ出したい気持ちだったが、ジョーイの様子に不安を覚えて、ひとまず大人しくテーブル席に着いた。

「で、注文は何にするんだ？」

普段であればエイミーがオーダーを取りに来ていたが、その日は当然ながらジョーイが

聞きに来た。大きな体格に不釣り合いなサイズの伝票は、まるで大人が子供のおままごとセットで遊んでいるような違和感があったが、ジョーイはいたって真面目な様子だった。

ハムとチーズのオムレツ、そしてマフィン。ドニーがいつもと同じ注文を告げると、ジョーイは「少し待ってな」とエイミーのお決まりの文句を告げてから、さっさとカウンターの奥に引っ込んで調理を始めた。数分後、テーブルへジョーイが運んで来た料理の味はまさしくいつも通りで、ドニーはほんの一瞬、自分の方が夢を見ているんじゃないかと錯覚しそうになった。

ドニーが食事を終えて店を出るまで他の客は現れなかった。と言うよりも、誰もまさかジョーイの店が開いているだなんて思っていなかったのだろう。「おいおい、まだコーヒーを1杯しか飲んじゃいないぞ」と言ってくるジョーイへ「ちょっと用があるんだ」と適当に言い訳をして、ドニーは店を出た。

面積は広くても狭い街だ。誰が病気になったとか、誰の息子が結婚したとか、誰が死んだとか、そんな話はすぐに回って皆が知ることとなる。

ドニーから話を聞いた常連客は皆、まずジョーイを気の毒に思った。誰もが「彼は妻を失った悲しみのあまり気が触れてしまったのだ」と考えた。そして心配になった。何とかして彼を正気に戻してやれないかと。長年、街の人々の憩いの場として活用されていたジョーイの店は愛されていて、何よりジョーイ自身が多くの人から愛されていた。

常連客はそれぞれジョーイの店を訪れて、彼を説得しようとした、最初は。だが、実際にジョーイの様子を見た彼らはドニー同様に驚き、店内の様子にもっと驚いた。

ジョーイはそもそも寡黙ながら真面目な男で、まるでマシンガンにショットガンの弾を詰め込んで乱射するように話すエイミーとは対照的な男だった。なので、誰もがエイミーの去った後の店は静かで、暗くて、陰気な雰囲気になると思っていた。だからこそ常連客は自分たちがせめてジョーイの助けになりたいと考えた。

けれど実際の店の様子は彼らの予想と異なっていた。もちろん、エイミーはもういない。それなのにジョーイの店はむしろ以前よりもにぎやかだった。

「ジョーイ、コーヒーのおかわりをもらえるかな」

「あぁ、悪い。ちょっと待っててくれ――分かってる！　そんなに言うならお前がコーヒーを注いで回れば良いだろう！」

ジョーイ一人では店を回すのに限界がある。そこで常連客は密かにルールを作った。注文は一人ずつ、順番に。そしてカップのコーヒーは少しだけ残して空にしない。

「トイレの紙が切れていたから変えといたぞ、ジョーイ」

「おぉ、そいつは悪かったな。――エイミー、だからさっきから言ってるだろ。お前も皿洗いをサボるくらいならトイレ掃除くらいしろってな」

店内で何か気になることがあれば、ジョーイへ告げる前に常連客がケアをした。勝手知ったるなんとやらだ、常連客ならではのサポートだった。

店内では以前に聞いたことのないようなジョーイの大声が響き渡っていた。そしてまた、常連客の耳にはいつしか彼へ怒鳴るエイミーの声まで聞こえるようになっていた。さらに常連客の声まで重なり、店内は以前よりも一層に騒々しくなった。

常連客の一人が言った、ドニーだった。「しばらく、このままで良いんじゃないか」

他の常連客が言った、「むしろこの環境がジョーイの心の傷を癒すのかも知れない」

カウンセラーやドクターの資格を持つ人間なんて皆無だった。だから彼らの選択は医学や心理学の専門家から見れば誤りだったのかも知れない。けれど、幸いにして彼らはカウンセラーやドクターよりもジョーイを愛していた。ジョーイの店は愛されていたのだ。

ジョーイの店は生まれ変わった。ジョーイ自身も人が変わったように饒舌になり、いつも無愛想だった接客スタイルも変わった。ジョーイとエイミーの夫婦漫才のようなやり取りは他のどのメニューよりも看板商品になった。

それから10年、ジョーイはずっと店を開け続けた。いっそ感謝祭の日もクリスマスの日も年越しも、1日も休まず朝から夕方まで店で過ごした、エイミーと二人で。客が誰一人として来ない日も彼らは店の看板に火を灯した。ジョーイの〝病気〟はいつの頃からか〝個性〟となって、やがて〝魅力〟へと変わっていた。

10年は長いようで短く、短いようで長い。その間に何人かの常連客はこの世を去り、その中にはドニーの妻もいた。

その日、店の雰囲気は普段と違っていた。いつもの怒鳴り声はまるで聞こえず、代わりにジョーイとエイミーの会話は穏やかなものだった。

「あぁ、分かってる、ジェイクのコーヒーが減ってるんだろ。……いつも気を配ってくれて助かってる」

「今朝はエリザベスが来てないって？　数日前に腰を悪くしたって話だからな。……お前もまぁ、体には気をつけてくれ」

「コーリーとジョンは仲直りしたかなって？　心配するな。連中のケンカは子猫のじゃれ合いみたいなもんだ。お前だって知ってるだろ。……そうだな、俺達も似たようなもんだ」

「今日は客の入りも少ないからのんびりしてくれ。……ありがとう、いつもお前がいてくれて、俺は幸せもんだ」

ジョーイとエイミーはやはり絶えず会話をしていたが、彼の対応の仕方はとても穏やかで優しいものだった。素直だったとも言える。近所の老婆が亡くなって、その日は常連客の中にも葬儀へ出席している人間が多かった。だから店を訪れる人間は少なかったが、ジョーイはそもそもまるで店内の客など一人も見えていないかのように、ただエイミーへ向けて彼が滅多に言わないセリフを告げていた。その様子がとても尊く見えて、店内にいた客はそれぞれ彼らの邪魔をしないよう、できるだけ静かにオムレツやエッグベネディクトを食べ、あるいはコーヒーを飲み干さないように香りを楽しんだ。

翌日からまたジョーイの店は元に戻った。そして再び始まるいつも通りの日常。誰かがこの世を去っても、残された者にとって世界は続く。残された者が去っても他の誰かが世界を続ける。

数週間から数ヶ月に一度、時には週に数日続けて、ジョーイの店から怒鳴り声の消える日があった。ただし、それはいつか分からない。明日かも知れないし明後日かも知れない、一週間後かも知れない。

だからジョーイのダイナーを訪れる客は、いつもの二人の口論を楽しみに聞きながら、たまに迎えられる夫婦の語らいを期待していた。「今日もジョーイとエイミーはケンカしていたよ」「今日はジョーイが優しくてエイミーも幸せそうだったよ」「ジョーイは普段は乱暴だけど、実はエイミーを愛しているんだな」　家に帰った常連客は家族や友人と〝今日のジョーイとエイミー〟について語り合い、そしてまた家族や友人に愛や感謝を伝え

た。

時が経つにつれ、街の人口は減り、常連客の数も減っていった。しかしジョーイのダイナーは変わることなくそこにあり、もう誰もジョーイがおかしいだなんて考えていなかった。

肌に触れる乾燥した風が、涙もすぐに乾かしてしまう日だった。

その日は店に訪れる客がいつもより少なかった。限られた彼らは〝優しいジョーイ〟とエイミーの会話を楽しみながら、去りゆくどこかの誰かに思いを馳せた。

「やぁ、ジョーイ。エイミーも元気かい」

ドニーが店に顔を出した。彼の表情は明るかったが、片足を引きずっていた。

「どうした、ドニー。お前さん、今日はジョナの葬式に行ってるはずじゃないか」

ジョーイはカウンターへ座ったドニーに、クマが友人のリスへ話しかけるように腰をかがめて尋ねた。

「昨夜（ゆうべ）、足をくじいちまってな。別れの間じっと墓地で立っているのはどうにも辛そうで、申し訳ないが葬儀は遠慮させてもらったんだよ」

「なるほど、そいつは大変だ。まぁゆっくりしてってくれ。……あぁ、そうだな。エイミーも少しは休んで良いぞ」

「心配してくれてありがとうな、エイミー。俺は大丈夫だ、あんたの旦那が今日も自慢のオムレツを食わせてくれればな」

足はともかく上半身はいつものドニーで、彼はジョーイだけでなくカウンターの奥にも手を振った。厨房には洗われていない皿が数枚、積まれていた。

ドニーは気まぐれに聞いてみた。

「なぁジョーイ、俺達もずいぶんと老けた。ちょっと体を悪くすれば一人で暮らすのも大変だ。お前さんもそろそろ人を雇ったらどうだ？」

言いながらドニーには分かっていた。雇って元気よく働いてくれそうな若者など街にはほとんどいない。彼が言いたかったのは、お互いにそろそろ〝引退〟を考えてはどうかという意味だ。人の死に触れても、若者は自分の姿をそこに重ねない。しかし人は歳を取ると、生きている人間の姿に死を重ねる。または鏡で見る己の姿に。弱って老けていく姿に終わりを見る。

「何を言ってやがる、ドニー。俺は大丈夫さ。……あぁ、お前もいてくれるからな。感謝してるよ、エイミー」

快活に笑いながら答えるジョーイに、ドニーは短く「そうか」と告げて、それきりその話題を引っ込めた。

その〝ルール〟に初めて気がついたのは誰だったのか。

街ではその日も誰かにとっての家族がこの世を去り、誰かにとっての親友がこの世を去り、誰かにとっての隣人がこの世を去った。広いようで狭い街だ。誰が病気になったとか、誰の息子が結婚したとか、誰が死んだとか、そんな話はすぐに回って皆が知ることとなる。とはいえ、久しく結婚話や出産話は聞こえてこなかったが。

家族を失って悲しみの真っ只中にいる人間は、ジョーイの店へ来ない。葬儀に参加している人間も、その日は家族や友人らとしんみり過ごす。だからなかなか気づく者もいなかった。誰かを失ってジョーイの店に来るのは、すでに一人での時間に慣れた者だった。も

しくは今も誰かと共にいる者だった。
噂はすぐに伝わる街だ。だが、その繊細な部分に触れられる者はなかなかいなかった。もしもいるとすれば、それは後悔している者だけだ。
「なぁ、ジョーイ」
店が閉まる少し前、カウンターに座ったドニーは他に誰もいない店でジョーイへ語りかけた。「エイミーは先に帰ったようだし、今日は男二人で話さないか」
ジョーイは少なからず驚いた様子だったが、数秒ほどの沈黙を経て、店の看板に「ＣＬＯＳＥＤ」の札をかけた。再び戻ってきた時、ジョーイの姿はまるで昔に戻った風だった。ドニーはしばらくぶりに旧友と再会した気がした。
「で、どうした」
静かな声音で、人柄を知っていなければぶっきらぼうにも聞こえそうなジョーイの問いかけに、ドニーは戸惑った。しかし辛うじて顔には出さなかった。
「なぁ、ジョーイ」
「なんだ」
「俺もメリルに会いたいよ」
メリルはドニーの妻だ、今はもういない。
「そうか」
「メリルに、あいつに会ったら、悪かったと言いたい」
ドニーの言葉は本音だった。するとそれが伝わったのか、ジョーイはやや間を空けてから
「俺は、ありがとうと言いたい。いつも本当に感謝していたと知ってもらいたい」
ジョーイの言葉にドニーはかすかなおかしさを感じた。「あんたはいつも言っているじゃないか」
するとジョーイは、「そうだな」
その声音に、ドニーは不意に悟った気がした。……あぁ、そうか、と。
そしてようやく理解した。
「なぁ、ジョーイ。あんたもしかして、ずっと正気だったんだな」
それはどれほどの自責の念か。いっそ狂っていた方が良かったと思えるほどだろう。
ジョーイは――妻を亡くした男は苦笑いを浮かべた。眼差しだけは優しかった。
「あいつはいつもうるさくて、騒がしくて、俺はいつも聞いているだけで満足していた。だけど、あいつはどうだったろうな」
「エイミーは……楽しそうだったさ。女ってのは自分の話が好きなもんだ。俺のとこだってそうだった」
「あぁ、そうかも知れないな。だが、自分がどう思われているのか聞きたい時だってあるだろう」
それもまた事実だ、おそらく。彼らにはもう確かめる術がないだけで。けれどそれは、確かめる術が彼らにないというだけでもある。
なるほどな、とドニーは悟った。全く遠回りで、いかにもジョーイらしい。懺悔といえばそうだろう。しかし頑固な年寄りにはむしろその方が効果的かも知れない。歳を取れば取るほど人の噂話は好きになるくせに、人の話を聞きにくくなる。それに重要なことは自

分で気づくことだ。
「そうだなジョーイ。俺もメリルには謝るよりも感謝したい」
「何だって構わないさ。何も言わないより、伝えたいことを伝えれば良い」
「あぁ、あぁ、そりゃそうだ」
　ドニーは笑った。ジョーイも笑った。ドニーは冷めたコーヒーをすすり、カップはすっかり空になった。
「おかわりはいるか？」
「そうだな。もらうよ」
「ちょっと待ってな」
　コーヒーを用意するジョーイの後ろ姿を眺めながら、ドニーは「ジョーイ、あんた後頭部が薄くなってきたんじゃないか？」
「年相応だ。あんたもだろう」
「違いない」
　改めて熱々のコーヒーを注がれるカップ。立ち上る湯気は香ばしい。
「いつもありがとうな、ジョーイ」
「こちらこそ、ありがとうよ」
　顔を合わせて感謝を告げるのは気恥ずかしいが、悪くない。自分が急に言われたら戸惑うかも知れないが、思いがけない言葉に驚く相手の顔を見るのは悪くない。ドニーは他の連中がどんな反応をするのか、メリルの笑顔を思い出しながら試してみようと心に決めた。

〈了〉